

上映映画解説

1956, 9

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 43

Le Grand Jeu

「外人部隊」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきました。今回はその第二三回として、九月五日から三日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）マジェエの「外人部隊」を上映します。

外人部隊

一二巻

レ・フィルム・ドゥ・フランス映画

一九三三年度作品

監督……………ジャック・フェデー

脚本……………ジャック・フェデー

台詞……………シャルル・スパアク

撮影……………アリ・ストラトリンク

音楽……………モーリス・フォルステル

……………ハンス・アイスラー

……………キャスト

フローランス及びイルマ……………マリイ・ヘル

ビエール……………ピエール・リシャルドウィルム

フランシユ……………フランソワズ・ロゼエ

ニコラ・イザノフ……………ジョルジュ・ピトエフ

クレンマン……………シャルルヴァネル

Le Grand Jeu

Florence……………Marie Bell

Imma……………Marie Bell

Pierre Martel……………Pierre Richard-Wilm

Madame Blanche……………François Rosay

Clement……………Charles Vanel

Nicolas Ivanoff……………George Piroeff

Le Colonel……………Camille Bert

Gustin……………Pierre Larquey

Aziani……………Nestor Asiani

Betty Dauville……………Lyne Clevers
M. Martel……………André Dubosc

Réalisé par Jacques Feyder,

Scénario par Jacques Feyder

et Charles Spaak

Opérateurs: Harry Stradling

et Maurice Forster,

Musique: Hans Eisler

Assistants: Marcel Carne

et Charles Barrois,

Production Film de France 1933.

解説

ジャック・フェデー(1888~1948)は、今更いふまでもなく、ルネ・クレレル、ジュリアン・デュヴィグイ、ジャン・ルノアルと共に、一九三〇年代のフランス映画を代表するばかりでなく、世界の映画史上第一流の監督です。彼はサイレント時代既に「女郎蜘蛛」「雪崩」「面影」「カルメン」「テレエズ・ラカン」等を発表し、第一線に活躍しましたが、トオキイにはいつて一時アメリカに滞在したが振わず、一九三三年帰仏第一回作品として生れたのがこの「外人部隊」です。

「外人部隊」は、この後でフェデーが統々と発表した「ミモザ館」「女だけの都」と共に、彼の代表作であるばかりでなく、映画史上忘れることのできない優れた作品であり、フェデーは、この「外人部隊」によってフランス映画界の第一線に復帰した訳です。

この映画が我が国で封切されたのは、一九三五(昭和一〇)年の五月(一日から大阪・京都・神戸の松竹館で、また八日から帝国劇場・大勝館・武蔵野館)で、大いに注目を集め、ルネ・クレレルの「最後の億方長者」に次いで、同年度キネマ旬報のベスト・テンの第二位を獲得しました。

三年前に作られたこの映画は、「ミモザ館」を経て、映画史上不朽の名作といわれる「女だけの都」へと発展する足がかりであると同時に、現代フランス映画に第一流監督として活躍中のマルセル・カルネがこの助

監督をしていことから暗示されるように、現代の映画芸術へ、いろいろな影響を投げかけているといえます。

なお、戦後の一九五三年になって、同じシャルル・スパイクの手で改訂されたシナリオにより、ロベール・シオドマクの監督の下にカラーによって再映画化が行なわれ、アルレット・テイ、ジーナ・ロドリゲス、ジャン・クロード・パスカルが出演していたことは、御承知のとおりです。

参考として、この映画の内容を、封切当時のキネマ旬報第五三六(一九三五年四月一日)号から引用してみよう。

略筋——ビエール・マルテルはその情人フローランスの奢侈を満足させるために多額の金を費消し遂に会社の金まで手をつけた。で危く訴訟沙汰にならうとしたところ伯父が金の問題は引受けてくれたので此の場は丸く納まつたが、その代り彼は外国へ亡命せねばならなくなる。ビエールはフローランスと共に逃げてくれといふが、浮華な彼女はそれに明確な答弁を与へてくれない。で自棄になったビエールは独り国を去って地獄の生活たるモロッコの外人部隊に投ずる。行軍と戦いと病氣と、それから絶望と空虚との外人部隊の生活。慰めは酒と女とだけであった。そしてビエールにはフローランスの面影が忘れ様としても忘れられなかった。それがいつ迄も彼の心を苦しめた。此の外人部隊で彼に親友があつた。ロシヤから亡命して来たニコラ・イザノフがそれである。ビエールとニコラの二人の宿の主婦はフランシユといつて世の中の憂さも辛さも知り尽くしてゐる女だった。だが、彼女の夫クレマンは懶惰でそれに豚の様な心の男であった。ある晩、ビエールはフォリー・パリジエヌの酒場でフローランスと顔容の同じな歌女イルマを見た。イルマはフローランスの金髪の代りに黒髪でそれに暖れた低い声を持った、頭にビートル疵のある教育のない女だった。だが、純情な女だった。そしてビエールがイルマに恋人の面影を見出して彼女と一夜の契りを結んでから、

イルマはピエールに真実の恋を捧げた。ピエールにとてもイルマが必要になって来た。そして彼はブランシュの厚意により彼女から金を借りて、イルマを酒場から引取りクレマンの宿屋に下働きとして住み込ませた。で二人の恋はここに進んで行ったが、時としてピエールにイルマが実はフロランスではないかと狂気染みた妄念が起るのである。するとイルマは男の言葉が恐ろしく、ただ泣いた。所でブランシュのカルタの運命判断の占ひは美によく当るのであった。彼女の占ひはピエールが人を殺す事を予言したが、それが実となって現れ、イルマをいどんだクレマンはピエールと争って、不慮の死を遂げた。ブランシュはそれを聞かされたが、次いで危険な進軍に我れと我が身を投出して行ったニコラが死んだ時には、流石のブランシュも嘆きに暮れた。彼女とニコラとの間には人知らぬ情心の心が結ばれてゐたからである。その後、ピエールの心が漸く平靜に立返った頃、伯父が死んで彼の許に遺産が入った手紙が来た。五年の年期があつたピエールはイルマの無上の歡喜にまで彼女を伴つて仏蘭西に帰る事を考へた。だが、カザブランカの港から帰国の船に乗るその前日、ピエールは不図バシヤに伴はれたフロランスに再会した。彼女を見るとピエールの心は再び彼女への熱い想ひに乱れた。そして彼女と会談した時、共に逃げてくれと追つた。だが女の心は冷たかつた。かくてピエールは前にも増して自棄となつた。

ピエールはもう世の中に生きる望みはなくなつた。イルマと共に暮す気にもなれぬ。そこで彼はイルマには内証で再び外人部隊に入り、イルマには金を与へて後から行くからと云つて彼女一人を仏蘭西に立たせた。然し、進軍の朝、ブランシュのカルタの占ひは死?と出た。ピエールは今度こそ屹度死ぬに違ひない。だが總ての望みを失つた彼は軍隊に加はつて行くのである。後に唯一人残されたブランシュの悲しみ。(三映社輸入)

(引用文の仮名づかいは原文のまま)

「外人部隊」は、トオキイの初期、その技術がやつと落着いたといつていい一九三三年の作品で、ジャク・フェデエにとっては、最初のフラン語トオキイ作品である。——というのは、一九二九年から一九三二年まで、彼はアメリカに行つて、アメリカ映画のフランス語版をつくつていたからだ。

「外人部隊」は、それだけに、まだ、「ミモザ館」(三四)や「女だけの都」(三五)に見るようなフェデエの完成を見せてはいない。だが、トオキイ初期らしいあたらしいところもあり、フェデエのわかさもでてゐる。それに、当時フランスでは、ルネ・クレエルが矢つぎばやに、クレエル独特のフアンテジイ作品を連発したところで、これに対するレアリスム系のすぐれた作品といへば、デュヴィザイエが「にんじん」(三二)で氣を吐いたぐらいであつた。フェデエのこの「外人部隊」も、簡単にレアリスムといつてはまちがひになるような、かなりロマンチックな要素の勝つた映画なのであるが、このフランス・レアリスム映画の大家がトオキイの初期、そういう、ややロマンチックな作品をつくつたといふことと同時に、そのなかに彼らしいレアリスム描写を、底流としてひそめてゐるということも見のがしてはならないとおもう。

いま「ロマンチックな要素」といつたのは、実は具體的にいふと、これはトオキイ技術の研究から出た一つのところみからきてゐるのである。映画を見たかたにはすぐわかることであるが、この映画で、マリイ・ベルは一人二役を演じてゐる。すなわち、パリの社交界の女と北アフリカの酒場の女の二役であるが、そこにトオキイでなくてはできないトリック技術がつかわれてゐた。

フェデエが無声映画時代からの本質であるレアリスムは、主人公のピエールが住んでいて、そこへ酒場の女をつれこむ下宿屋の描写によくあらわれてゐる。フ

ランソア・ロゼエがこの女將に扮して、入神ともいふべき演技を見せてゐるのは、その後もたびたび語り草となつてゐるほどだが、その夫になつたシャルル・ヴァネルの演技もまた非常にいい出来で、この下宿屋のアフリカ三界の雲田気描写こそ、フェデエの真髓がもつともよく出てゐる点である。

しかし、フェデエといふのは、人間的にはむしろロマンチックであるといふ点もおもつてゐる。マリイ・ベルによる声の二役は、トオキイ初期の技術的な一つのころみにはちがいないが、そういう人物を考えたことはやはりフェデエの本質に関係があるのである。このベルギイ生まれの監督は、よく見れば方法としてはレアリスムの信奉者であるけれども、精神的にはやや神秘がかったところがある。それをトオキイの音声技術のころみにひっかけたところ、また彼がレアリストである特徴もでてゐるのである。(声の変化はダビングによつておこなわれた。)

主人公は、この二人の女の声がちがうことは知つてゐるが、顔がおなじなので、心をひかれ、別の女とはわかつてゐても、前の女とはくちくちにならないそのやさしい心根に恋をおぼえ、やがて一緒に住むようになる。このアイディアは、映画の骨組をつくるうえで、非常に大切だし、有効でもあるのだが、雲田気描写とは別に、ここに「おおきな賭」(「外人部隊」のフランス語題名)があることに気づかなくてはならない。このトリック技術自体が一つの賭である。それは写實的な描写のなかに挟んだ非現実性だからである。

またここに、第二段の、さらに重要な賭がある。これは「人間の分身」を信じさせるという賭である。無理に押しこんだダビングは、技術的にはうまく行くだろう。しかし、ただそれが、「よく似てゐる別の女」というだけなら、この第二段の賭がうまく行つてゐるといふわけには行かない。

声がちがつても、心がけがちがつても、男が双方に恋してゐることは、結末ちかに行つて、筋のうえにもハッキリしてゐるが、それが女一人の分身とし

て、二役にわかれてゐることが、観客に果たしてわかつたであろうか。この点、この映画は、成功してゐたかどうか、ぼくにはただししい判断がくだせなかつた。——というのは、幸か不幸か、トオキイ初期においてぼくたちがダビングを気にしないわけには行かなかつたからである。フェデエもそれを、技術的に「おもしろい」でやったことはたしかであるから、やはりそれを意識しすぎたきらいがある。

それにもかかわらず、この映画で興味があふかひのはやはりこの点である。下宿屋の雲田気描写は、いやでも感心する。だが、この「分身」の表現には疑問がある。しかし、これはあとで考えると、やはりいつまでも後味としてのこの映画の印象に、おおきな場をしめてゐる。むしろ純粹技術的にうまうまやつてゐるだけに、かえつて映画ではこれが氣になるのである。フェデエのちには、この分身のえがきかたを、そういう「おもしろい」技術では無理であるとおもつたにちがいない。だが、当時は、これがフェデエをうごかす技術的なおもしろさになつてゐなかつたし、ぼく自身にとつていへば、これからのちのフェデエの作品「ミモザ館」や「女だけの都」の女性のえがきかたにあらわれる複合的な描写に対する「鍵」をささるキツカケにもなつたのであるから、やはりこれは大切に考へたい。これによつて、フェデエが、彼の人間性に対する洞察といふ点で、女性といふものの分身を、そう無難作にあつかわないことも、やがて納得できたからである。

そういう点からでもあらうか、この映画には、目に見える外見的な描写とは別の、およそ熱っぽいアフリカの雲田気とはちがつた、一種ミステイクな情熱がながれてゐることが感じられたのである。「フェデエの分身」であるそういうロマンチズムと彼が習練したレアリスムの手法との調和は、つぎの「ミモザ館」や「女だけの都」において、珠玉のように、あるいはシャンパニエのように發揮された。いろいろな意味で、この「外人部隊」は、きわめて興味あふかひ映画なのである。(フィルム・ライブラリー運営委員)

ジャク・フェデエ主要監督作品一覽

- 「女郎蜘蛛」(一九二一年)
 原作 ビエール・ブノア、主演 ナビエルコウスカ、メルシオール、アンジエロ
- 「クランクビーユ」(一九二二年)
 原作 アナトオル・フランス
- 「雪崩」(一九二三年) スイス
 脚本 フェデエ、主演 ジャン・フォレエ
- 「面影」(一九二四年) オオストリア
 主演 アルレット・マルシヤル
- 「グリビシュ」(一九二五年) フランス
 原作 フレデリック・ブウテ、主演 ジャン・フォレエ
- 「カルメン」(一九二六年) フランス
 主演 ラケル・メリエ
- 「テレエズ・ラカン」(一九二七年) ドイツ
 原作 ゴラ、主演 ジナ・マネス
- 「にわか紳士」(一九二八年) フランス
 主演 アルベール・プレジヤン、ガビイ・モルレエ
- (以上サイレント)
- 「接吻」(一九二九年) アメリカ
 主演 グレタ・ガルボ
- 「緑の亡霊」(一九三〇年) アメリカ
 主演 アンドレ・リュエ
- 「もし皇帝がそれを知ったら」(一九三一年) アメリカ
 原作 モルナアル、主演 フランソワズ・ロゼエ
- 「印度の寵児」(一九三二年) アメリカ
 主演 ラモン・ノザアロ
- 「あけぼの」(一九三二年) アメリカ
 「アンナ・クリステイ」(一九三二年) アメリカ
 原作 ユウジン・オニール、主演 グレタ・ガルボ
- 「外人部隊」(一九三三年) フランス
 脚本 シヤルル・スパアク、ジャク・フェデエ、主演 フランソワズ・ロゼエ、ピエール・リシヤル、
 ウィルム、マリイ・メル

- 「ミモザ館」(一九三四年) フランス
 脚本 シヤルル・スパアク、ジャク・フェデエ、主演 フランソワズ・ロゼエ、ポオル・ベルナアル、アレルム
- 「女だけの都」(一九三五年)
 原作 シヤルル・スパアク、脚色 ジャク・フェデエ、ベルナアル・ズインメル、台詞 ベルナアル・ズインメル、主演 フランソワズ・ロゼエ、アレルム、ジャン・ミユラ
- 「鎧なき騎士」(一九三七年) イギリス
 原作 ジェイムズ・ヒルトン、脚色 フランセス・マリオン、主演 マルレエネ・ディトリツヒ、ロバート・ドウナット
- 「旅する人々」(一九三八年) ドイツ
 主演 ハンス・アルバアス、フランソワズ・ロゼエ、カミラ・ホルン
- 「北の掟」(一九三九年) フランス
 「一人の女が姿を消した」(一九四一年) スイス
 主演 フランソワズ・ロゼエ
- (「一覽は主として飯島正著「フランス映画史」による)